

吉田文化会館 だより

題字 渡辺颯人

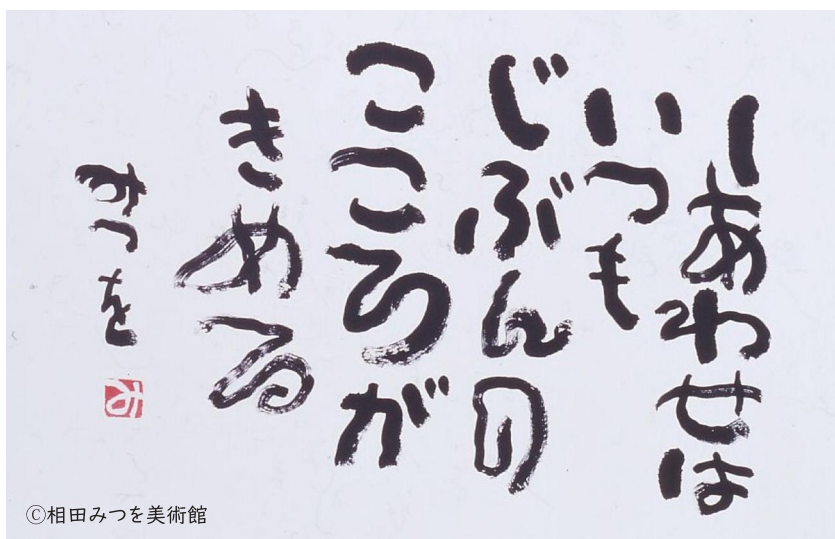
第133号

2020年11月

あい だ か ず ひ と

人権週間のつどい 相田一人さん講演会

11月29日(日) 14:00～15:30 笠岡市保健センター



©相田みつを美術館

「しあわせは いつも じぶんの ところが きめる」 ～ 父「相田みつを」を語る ～

心に響く 相田みつをさんの言葉

相田みつをさんは、日本を代表をする書家・詩人です。シンブルな言葉で平易な詩を独特の書体で書いた作品で知られており、書の詩人、いのちの詩人とも称されています。

相田みつをさんの言葉は、人間を「にんげんだもの」として、人間のありのままを平易な言葉で表現しています。それは、人間というものを、それ以上でもそれ以下でもない等身大の存在として肯定しているのです。

新型コロナウイルス感染症によって、マスクや消毒液が店頭から一時的に入手困難となりました。そんな中、みつをさんの「うばい合えば足らぬわけ合えばあまる、うばい合えば憎しみわけあえば安らぎ」という詩が、SNSで話題になり、多くの人から、「やすらぎをもらった」と投稿がありました。

新型コロナウイルス感染症対策を行っていますので、多くの皆さんの参加をお待ちしております。

相田一人さんプロフィール



相田みつを美術館館長。昭和30年栃木県足利市生まれ。書家・詩人である相田みつをさんの長男。

出版社勤務を経て、平成8年、東京銀座に相田みつを美術館を開館。「じぶんの花を」「本気」「ある日自分へ」「文化出版局」。「いまからここから」(ダイアモンド社)などの編集、監修に携わっています。著書に「父相田みつを」(角川文庫)「書相田みつを」(相田みつを肩書きのない人生)(文化出版局)があります。平成15年11月、東京国際フォーラムに新美術館をオープン。

現在、美術館業務の傍ら、全国各地での講演活動や執筆活動を行っています。



人権まんが説
解

国内でも新型コロナウイルス感染症が広がる中、自らの感染への不安や偏見によって感染者やその家族、濃厚接触者、治療にあたる医療従事者の方々などに対して、誹謗中傷や差別的な事象がおきています。また、インターネットやSNS上でも、心ない投稿が後を絶ちません。

日本赤十字社は、差別や偏見が生じる理由として、「見えない敵（ウイルス）への不安から、特定の対象に見える敵とみなして嫌悪の対象とします。嫌悪の対象を偏見・差別し遠ざけることで、つかの間の安心感が得られる」と説明しています。

私たちがこれまで経験したことのない新型コロナウイルスに対しては、誰もが不安や恐れがあるかもしれませんが、どんな状況であっても不当な差別や偏見、いじめにつながる行為は許されるものではありません。

今、私たちが闘う相手はウイルスそのものであり、人ではありません。不確かな情報や誤った認識に惑わされることなく、国や県・市などの公的機関が発信する確かな情報に基づき、冷静な判断と人権に配慮した行動が求められています。

私たちは誓う 平和な世界を築くことを！

8月6日、ヒロシマで行なわれた平和記念式典に合わせ、保健センターで「笠岡市原爆死没者鎮魂式並びに平和祈念のつどい」が開催されました。式典では「岡山龍谷高校」の生徒による「平和の誓い」が朗読され、参加者は、非核平和を実現する思いを強くしました。ここに、全文をご紹介します。

「平和の誓い」

一九四五年八月六日、七五年前のヒロシマの朝は、普段どおりの人々の暮らしがあった。大通りを行きかう人たち、路面電車でゆられ談笑する人たち。家では朝の身支度をする子どもたちの姿があった。これから起こることを知ることもなく。

八時一五分 エノラ・ゲイは、広島の上空に一発の原子爆弾を投下した。その原子爆弾は、地上まで五八〇メートルの高さに到達した瞬間、火の玉と化し、強烈な熱線と爆風で一瞬のうちに人間を焼き尽くし、ヒロシマの街を廃墟にした。

巨大なきのこ雲の下で起きた惨状を見た人は、後にこう語った。だれとも知れぬむごたらしい遺体、水を求めて川に飛び込む人々。焼かれた皮膚を引きずりながら、幽霊のようにさまよう人。倒れた壁の下で、うめく子どもを助け出そうとする母親。迫りくる炎、「このまま苦しむだけなら」と、ひん死の娘を板切れてたたく父。すべてが地獄だった。

たくさんの命がそこにあった。私たちと同じように、未来を夢見て、懸命に生きる命が、日々の暮らしに幸せを感じ、手を取り助け合いながら生きる命が。その命が一瞬にして奪われた。何の罪もないのに、あの時代に生きていたというだけで。

あれから七五年。核兵器という人類が持つてはいけないものを、地球上から無くすための時間は十分にあったはずだ。しかし、現実は一万四千発の核兵器が存在している。なぜ、なぜなくなるしないのだ。

一四万の奪われた命に、私たちは心から誓う。こんなにもたくさんの命を犠牲にした戦争を、核兵器の使用を、絶対に繰り返さないことを。地球上に住む私たちが、あらゆる壁を乗り越えて、核兵器のない平和な世界を築いていくことを。

原爆の影響で、「七五年は草木も生えない」と言われたヒロシマは今、

木々の緑があざやかに街を包み、人々の笑い声がこだましている。そこには夢がある、未来がある、そして希望がある。私たちは今、平和の尊さを全身で感じている。この平和が憎しみに満ちた戦争で奪われないように、平和のうねりを全世界に届けていこう。次代を創る一人として、平和な未来を創る仲間として。



楽しかった夏の思い出

8月12日、漫画家「南一平」先生と画家「荒木章子」先生を講師にお招きして、夏休み子ども絵画教室を開催しました。

両先生から色づかいなどのアドバイスを受けながら、少ない夏休みの中で、楽しかった思い出や迫力ある人権ボスターを描きました。



笑う顔には福来たる

日時 11月10日(火)14時から

落語家三遊亭楽団治さんをお招きして、人権塾と落語会を開催します。

笑いと健康とは密接な関係があり、笑いながら生活することは、実はとても大切なことです。多くの皆さんの参加をお待ちしています。

